文東

五六

春五六

夫木和哥抄巻第五

春部又

題

帰鴈　春曙　野遊　春野
春海　春雅　三月三日　桃花
雉　喚子鳥　雲雀　苗代
春田　蛙

○帰鴈

天慶五年亭子院御屏風

貫之

春霞こひしとけいめる彩さ　部上六帰六
三百六十首の中　歌イ
帰雁　部上三月終
なつかしのるみくさのけりをとや　帰雁
後拾遺　中納言家持

万十九
春まちてかくこそなるとも秋の風に　万十九
太神宮百首五十の　後鳥羽院御製
如月の雪の山をおもかけにかすむ日数の空
百首御哥　順徳院御製
なつかしの波や秋よりうらん　秋後

○夕すゝしけりや雲とりみえやまとかりの春の様

小山田の庵ちかくなく鹿の音におとろかされておとろかす哉

百首哥　　　従二位家隆

色そへて侘人かよふ山田の原のあきの月かけ

久安百首　　　花園左大臣家小大進

秋来てはさもあらぬ身の庭の面もこゝろにかゝる萩の花すゝき

六帖題新六　　　光俊朝臣

むかしの秋の露わけし袖に鹿の音きゝてや袂にのこりけん

百首哥　　　正三位知家卿

古もおもふこころつくしのかりかねのうはの空なるむかしの白雲

建保三年内大臣家百首夕鴈

信実朝臣

鴈かねのさつしくやまとにゝしたのきのさひしき雲の夕暮

洞院摂政家百首眺望

俊成卿女

ふるさとの雲の旅よ秋ふけくらしての庭にかへる雁

五十首哥名所秋雁　　　土御門院小宰相

あまの河秋もやなれもちかきらんかさゝきのはしのよそへゆく鶴

宝治二年百首帰雁　　　正三位知家卿

帰る雁の雲居のたかみもたえ〳〵り又故郷の春いそくや

建保二年三月家故郷哥合霞帰雁

藤原雅親

たちかへる霞をいとふこゝろかはゆく雲のよそにすくるかり哉

寄判者　基俊　古今の仙人の衣の心をよみ侍りて

よそにしくらん帰るとて

同イ　　従三位頼政卿

羽

久雲居をよみの衣いくへさしてさしもさかしき越の空をとぶらん

苑 哥競抄

中院入道太政大臣家哥合海上の雁を

雲井よりかへるかりかねしほしほのはるかのみなとやまよりけり　めイ

源忠季　王義

天仁二年十一月顕季卿家哥合

琳賢法師

淮南子云雁從北而飛以冬氣以避繒繳　繒同矰繳史記注弋射也

○朗詠

○ちとせまて足をとひてや帰る人宿のつ道ゆく花をさき見る　嘉しイ

寶治二年百首帰雁

後九條内大臣

うち衣たちかへる山の雲井はるかにたなひくかすみや春の下帯

百首御哥　同イ

立かへる雲のあはさの山もとにおもひすみけの春の雁かね

柿本新撰百首　同イ

あり明の月もたへてや帰るらん行雲の雁の今

貞應三年百首

民部卿為家卿

その名をやかへるたのみにあまつかりうつむ山路の花の今の幾

嘉禄元年九月十三夜詠百首

うらみかへるや桜さく山もとの雲井のよそにかへる雁かね　同

百首御哥夕雁　吟イ

慈鎮和尚

さそふともことなかりてすくはるの花のなごりにかへるらん　こちイ

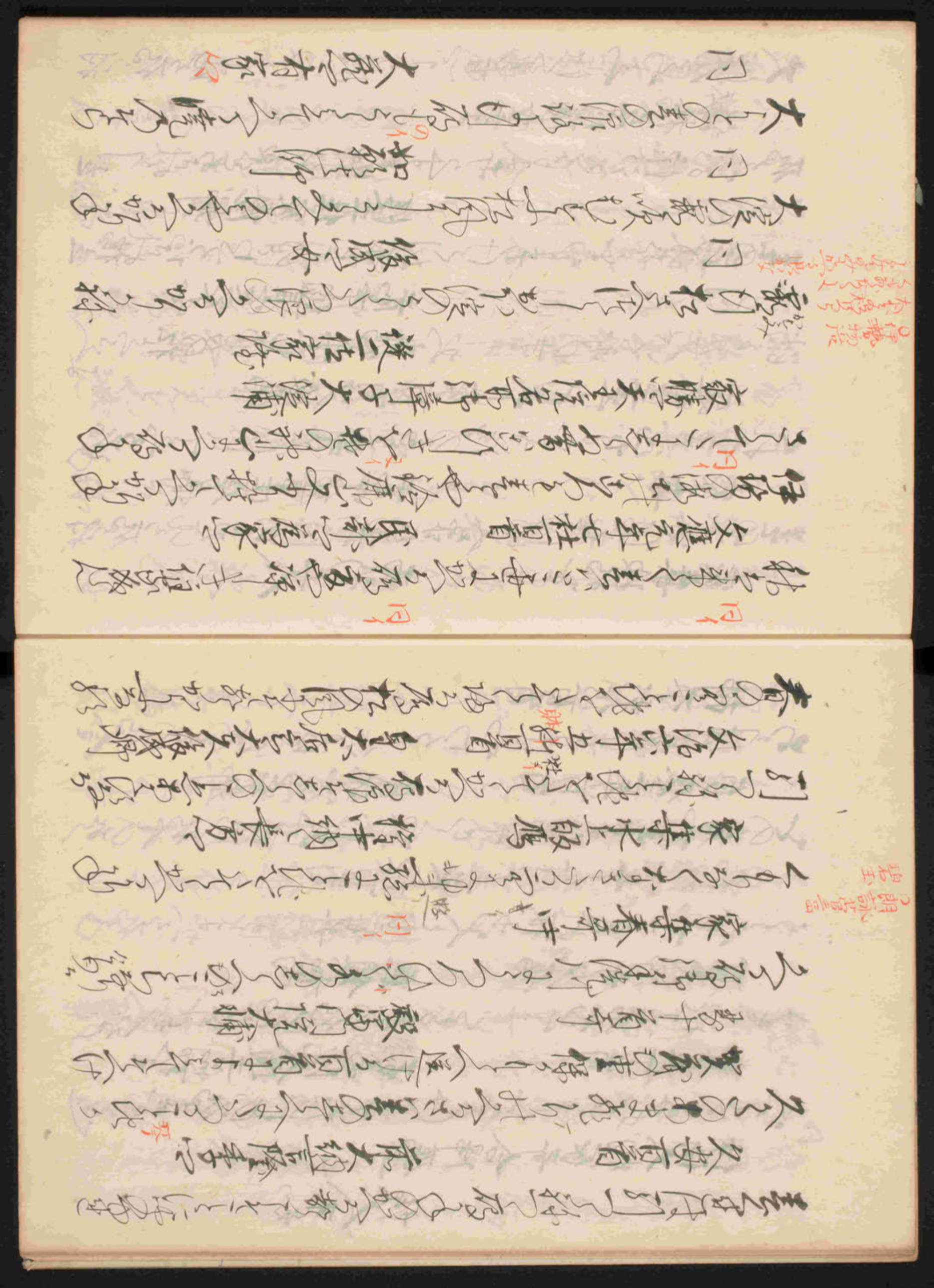
家五十首　集イ

嘉陽院入道二品親王　光イ

みかさまるおくれてのかりをみさけまてたのむしの雁かえるさくさる迄

伊勢大輔家哥合帰雁

読人不知



大深草院御所歌合

海橋立同懐文書よ

藤二位家隆卿

同

春の夜のあけぬるかとあけくれば月も雲ゐの橋立

前中納言定家卿

踏をたのみ行く舟の末遠(末カ)

建保三年内大臣家百首歌

秋の月

くれぬるかり山ぢとき待の高よ

家集

前中納言匡房卿

春の夜のうらぶれ深のみなとにはいまつさとのもりの月

家集後拾遺

西行上人

同

同

同

同

○題詠

玉葉のもりの松もとゆるかぜ

建長八年百首歌合

信實朝臣

つくりてうへる

家集

三位知家卿

かぶ

弘安八年仙洞百首

権中納言家冬卿

舟もとまらぬ浦の波のよるの雪

建長三年千合

知家法師

雪の白ゐ若ぬ

家集百番千合

光俊朝臣

少へゆくみやこの雪のうもれぬ

寶治二年百首歌

同

七宮[illegible]井の石の[illegible]て少へむ[illegible]世をいのら

建長八年百首三合　　藤九郎内大臣

[illegible]人[illegible]あさ[illegible]井のつり舟

二条百首　　修[illegible]

[illegible]

[illegible]

建長八年百首哥合　　藤原伊[illegible]朝臣

[illegible]

同　　光俊朝臣

[illegible]

家集名不帰鴈　　左衛門督中宰相

清見[illegible]

負鹿三年内題百首　　民部卿為家

きよ[illegible]

家勝三天王院名不詳歌　　[illegible]

[illegible]

建仁元年老若五十首哥合　　慈信和尚

[illegible]

建長八年百首三合　　後嵯峨院

[illegible]

[illegible]　　前大納言伊平卿

[illegible]

兼元三年長尾社の合戦帰陣

あさみ殿一族をはくくり刑部の長六郎の名を聞きて

同　　佐々佐家隆

久々利殿一族の朝日殿の朝日

同　　法印幸清

名越殿をやぶる殿原よりの名越の名の如き長谷をたてゆく

同　　秦野雅経卿

去年の秋のしもをくまつ殿やまいをしの人々

同　　佐三佐保孝

雑賀殿と杜間殿い杜殿やをと殿の原よりの名

同　　法印献因（献）

三佐家衡

雑賀殿さくよ根やみくらんの去のかりの名

同　　如行法師

ものしたて家清をこれ名のもるかの何をうをの

同　　権大僧都（然言イ）定範

高野や尾上をの雪のうの名の名越をまつ風をしく

同

厚美の宮ひ都宮金殿もりあるを須賀川

同　　法橋円快

杜浦をあくの家よりの名の如の原は去風の如

同　　法印眼清（昭イ）

雲住く原殿のまよりまて鳥羽田の浦をの名かり

同　　法印（留イ）　　（ちらみイ）　　（ヨイ）

源光行

出羽国かたくりの浦の海の石の石
同　　権少僧都秀厳
うりの数の吹返る芦風
建保三年名所百首　　前中納言定家卿
塩竈の浦こぎ出でて遠方の
同　　正三位定家卿
大海の磯もとどろに寄せかけて
同　　正三位知家卿
大海の磯もとどろに寄せかけて
同　　権僧正女
海人の釣舟
同　　従二位家隆卿

宮津の山の松の白雪
同　　正三位知家卿
波間なき浦の松原
同　　従三位範家卿
鶴の声
同
折しも雪の松山の
建元三年長尾社哥合　　権律師玄献
雪も今は春の松山
光明寺入唐構図家　　従二位家隆

寶治二年百首歌

従二位頼氏卿

山風よ雲も吹きはらへ秋の月

光臺院入道二品親王家五十首歌

西園寺入道大政大臣

見るまゝに消ぬるそらも花ぞのゝ雪の曙

文治三年百首

前中納言定家

新千載春上

春をけふまゝ雪よ消ぬ山の端のうゝ見も果てゝ霞ぬる

千五百番歌合

正三位季経卿

もるゝと雲ぬ吹ぬ春の夜の月

同

長秋下

山や宮野ゆきもとゝ月

小侍従

雲つゝく遠ぬ春の里の夕霧

十市

隆信朝臣

月

春といへ春はまだいの心ぬ

前大納言忠良卿

同

ゆく春の月をゝのむ春の風

参議雅経卿

同

三吉野やたのむ花の春ぬ

建保四年内裏十首歌合

従三位行能卿

雨イ

春風よ雲ぬ花ぬ春の心ぬ

中務卿宗尊親王

元イ

三百首歌

流歌イ

いとせんかのさそくとをしてこうかう
安義社百首
慈鎮和尚
春風は花のかをりをたきものにしてやがてこれをうつす
式子内親王
正治百首春御所
水堂の鐘もこまつ波みのあけぼのとこそきこゆる
同
あくがれの袖をやなんなほ通ふらんかの神よりてしりの秋
寂蓮法師
正和三年毎日一首
民部卿為家卿
ふるさとの春のあけぼのをしるかな
あつさをもはらはんとてあけぬるかの山の雪のをしるかな
永仁元年内裏御会
南殿落花
前中納言為兼卿

三月まで花の歌よみあつめたりしかの一作
百首御所
慈鎮和尚
花さそふ嵐の庭の雪ならぬ春の月にはあらねども
春曙　曙
六百番歌合　曙
前中納言定家卿
霞のもとの花ぐもりにまさりてまさるこの宵の曙
判者秦河内守
城陽寺
ちりぬべきかぜ
ちりぬべきかぜ
正三位経家卿
同
霞のもとの花ぐもりにまさりてまさるこの宵の曙
大納言有家卿

さらしなにてよみ侍りける

はるかすみ立へだてたる月をすむ千しほの海のそこ

はるかに

同

雅藤上

思わすせまてこひはさわるらんすむ月の影

百首歌

後嵯峨院御

武士内侍

あるのみも袖もまつはる夕の色にて秋はきりぬ色のあはれ

文中之翁哥 墻柳林鶯受動人

前中納言定家

いはれんなくて袖の世をりとはわけなき千しほの色のにそ

於角下

君臣歌哥合

前中納言為兼

思ひそめきしつの時よりこれの色とそのうらはかなきこそ

寶治二年百首

後九條内大臣

二見うらにて

うら

はるくれ

はるくれ

○野遊

六百番哥合野遊

後京極摂政

川はら上

都人屋とをすきにけるそよかせてはるもしるもなきをつ

同

慈鎮和尚

ひとそこの色の野へをしるみはるの大空人乃すむ色にそ

同

隆信朝臣

いつ方にはるのひよりの色の野を堂つむてあるらつ

同

前中納言定家

於ある上

みな人の色はいのかるひ色にて別ある野人の色のけふ

野遊

旅人之詠

百十

春の野の浅茅かうへは思ふともおなし道にはまよひそめ

嘉元々年式部卿親王家千首野径

条讃為相卿

引そめし袖のひきちしめ春のゝ花のしけきまてなる里人（もろイ）

○春野

百首御哥

藤鎮和尚（円陵）

春の野は梅にまかけて行人のあとたえやらぬ袖の香そする

後京極摂政家五首歌合羇中眺望

大蔵卿有家（人〔古〕）

むさし野や野もせの草木はるもなほいつかみとりの末そはるけき

嘉禄四年百首野遊

民部卿為家（人〔古〕）

（朱）寛文云 [illegible]

あくるゝにゝの野きうつろへ野へ一ゝ春のやまりかなし（几）

家集

好忠

むさしこきてまえさめて春の野をゆくらのましろの御さく（野〔系〕）

春海

建長三年毎日一首中

民部卿為家（人）

朔日さの浦七井にはさりそめてのひゝ春のゝくたまはりより

百首哥

殷富門院大輔

よさの浦ゆ春の浦くゝ見渡せいとほしのまとゝる刈なと

掃木新撰百首春二十中

後九条内大臣

吹風にありそのまつ浪たちてしほの花さくよもすから白露

永観二年一條大政大臣家障子絵

能宣朝臣

（家集）
玉ちめ刈浦ちやよろこんにゆうきのいそしくのを清かふ小竹

御集春佐の中　中務卿のみこ

夕ぐれの春の塩干にしほひさし寄せてよせきよるれ松そら

千五百番歌合　後京極摂政

（月清上二）
和田の原霞よかりて波よ舟かとぞ見る春の夕暮

御集

七宗ゐ春のけさまでしきやどの浦のの袖やぬらん

現存六帖　頼守法師

紀の浦のさひらの潟のおきつその春の月てらくあま人

定家百首海　前中納言定家

いとゞ春の浦とのあたりもみられ里住らしの浜

家隆四天王院名所障子住吉

白菊のあかいし秋もまちすてきつ雲のゐる風

建保三年名所百首　従二位家隆

二月や中のみさきは風さらぬと流る舟のあさもこえん

同　従三位範宗

春風のとやすきあけの浜千鳥なるさ浪の花よ帰るり

春雑

家集　赤人

春山のあさみの花のふくろめきみよまよめなちる花こひ

三百六十首中　好忠

花の時いまささそらんみらしの萩のやくふいとなくてんべき

建久七年百廿八首　　前中納言定家
朝露のをしわ玉のをわりかねはきえかへるへきうき春のまくらかな
一句百首春歌中
むしの音は寝覚の夜におとろかて秋のまくらもぬれにけるかな
百首哥野五首中　　藤原為顕
名もしらぬ草の人はしられくてしらしくきさ野への露草
永仁元年豊慈百首
竹ちかきまとの竹にそ出てみる来つくまかふ夕色の影
寛元三年結縁経百首　　民部卿為家
春きてはけさみつか森にぬれにけりそれかけに出し月の影
やけ山のなかゝものすゑをひとつまて千すむ宮井をとへる
千五百番歌合　　後京極摂政
うらゝなる春の二月のみか来を待せてひとりおもふ比哉
仙洞御会三首法三の春風不忘家
おもひをへてくたの春夜しも弁るいきき君か代世には春風を吹
御集　　後九條内大臣
はるみえんもしれぬるうけみても千鳥の袖よりそまとはる
百首三の　　寂蓮法師
木のめはるいとく日やをそみかへらんよしのゝ奥の春の山かせ
承久二年四季百首春山　　前中納言定家
さくらやまちの夕まよはれそそれわくかき世にとまる春の山かせ
家集春哥中　　恵慶法師
田くさえにつめてもあかぬ上をいこのむすもなからよ乃り

あるかの屏風に三月藤柳家を
こむらさきやまきの家によりまさて花のかさ我宿の
三百年前中　　好忠
海苔はまもとめくれよあまのかりもしへこのとしとてかりそかり
さくきつゝすきさらぬ春の春毎にえりすまつもとかりの家
見てのみ多くあくきも浪よりはかるるとなにを雑
夏の月のよりの月の花の数をもとめて清宮とそこそ
六帖題　　永光
長谷関大臣
ひとりの植ものゝ花のくきに羽をまさてあれ
百首年中　　寂蓮法師
まとあまりきの落むしとしらはいとしもさてや道のあき

○三月三日
六百番の合三月三日　後京極摂政
夜花をかのまとあのまえすて清るよめくあのさうつき
中宮権大夫家房卿
月はよう花のさうつきや流さて清きたなりるらん
前中納言定家
月
かゝ人の袖をはらさうきの波よもさふとてもあらり
慈鎮和尚
月
西のなるまとまよにりつしかすの花ゝ春のやうせ
西行法師
月
なるまきて花をとてうきさうつきさて雑よとえもわる
寂蓮法師

花の色は人目をのこす木なれば春の暮にぞ思ひ知らるる

同　　法橋頭昭

さつきの流をよつけてかゝる人のすゝめをそなふ

文安百首　　前大納言隆季卿

我せこや花のつもるを人かゝる野辺もしるの子をとゝまるさけよ

天平勝寶二年三月二月宴寺

中納言家持

五月九

かゝる人の命をうゝ稚てとりて我せこ花のつゝせを

文安百首春哥中　　前大納言隆季卿

さつきは待ともきてもうるはの山ほとゝぎす

承久二年内裏二首歌　　民部卿為氏

時鳥人もすさめぬ心のそこの人も花の夕暮

建長五年毎日一首中　同

毎まのとゝ花のうゝ桃の花のうゝひとゝ

文永四年毎日一首中　同

四月をとりわくまて花よひとゝ時て桃の子をとゝ

同二年毎日一首中　同

めつらしく三月も久しく三月をせよまて桃の花のさつき

六帖題三月三日　　権僧正公朝

かきなをしたの字のゝ繰返てこゝろのさつき

寄水懐恋　　慈鎮和尚

思ひ出て袖のうゝなくれ水よりきてたの字生の水の美

百首歌寄月恋　　同

○桃の花ちるあはれもつきすまつきをと

同東林院

書きあつめしの字よ海やはなかつ通ととりて

八雲抄云戒

おもきともちりてとて桃の花さかりに

顕宗紀九年三月己巳条飛鳥岡本宮

はしこ百済敬初を曲水の宴に我国よりはじめ

伶人のさまとてその作いきもあるを

を得給へるもうしろをこのうたを交

伶人のさまとてとて三月とて作りを

野史事二月ゆゆしきしらのへをけら

ゆゆ人上の三月をとりてもたるよ例おも

て十二月よりなりてきしし物を詩句いろ

よ人のもろよ花さまも物よいもをすく伶人の

ふさにおりて神なりこもいをす夢

きるなりさるのをぶくとろまとよ

たまり井をるるとりてうるを

をすかきりよ作りをれとして

家集三月二日

むるる三月よるまいるる

後頼朝臣

○桃花

大堂と悠紀方屏風

前中納言匡房卿

○くるまもさてくる花さ三月をとをさくるる桃の花はて有

安樂寺宴廟所桃花

三月ばかりに井の上の桃の花

遊桃花をして　後拾遺朝臣

雲のうへ遊ぶ人にかりのそめの桃の花のよそめを

六帖題新古今　光俊朝臣

三月のつごもりの日の雨のそそぐこの宿もいまさらに

三百六十首中　好忠

三月ばかりに

ちぐさにつむ三月の月ぬきをしひけぬ我宿の桃

三日六一　貫之

むらぐもの花をまとはぬ春の日の月をしまちつつ

六帖題桃　拾遺西行朝臣

天の川きしの桃の花の色にあかぬ春の日の月をしまちつつ

○朗詠

○雑

関白殿帝雑　中納言家持

五十九

ものいはぬ春の雑子の時なれば

緑花　人丸

五十

雑子帝たちの殿と聞えしかば

五十三

いのちをしらぬ春の雑子　おきのうへの雑子　あけぬれば

立ちてもいてもこがらいの

沖集雑子　徳金右大臣

金槐集

ちぐさの花上の雑子あさぢふの雑子

西治二年百首　西三位経家卿

雑子帝ゆかりの色をたづねてもいとさくらの花ぞ

老若五十首三合　後鳥羽院御製

○五月雨時鳥　ことさきだつ文字は助字へくだり

むさし野の雑子やいとよをとりあつまるとて

六百番歌合　後京極摂政

武蔵野のきゝすもはてはやこすりとんぐりの鳴

同　慈鎮和尚

鳴てこそ雑子の屋とを見はてゝすゝの屋の草の下

同　寂蓮法師

かり人のゆく野の雑子妻こひくるなく音をやたゞ

同　大納言有家

焼こりかゝる心ぢをわせるすゝ野のゝ草も二葉

同　西三位季経

沛野なる人やきゝつゝ見ぬのゝ雑子あるまとゝ

関白　中納言家隆

すきの野よりとゝ雑子いとをるゝ雑子の妻も

題不知　後人

ゆく末の心ぢをゝ沛ゆゝ見ぬ雑子は

稲荷百首　指宿四位朝

もゝとせの花やゝ心ぢをゝ沛ゆゝ見ぬ雑子

花園の千七首歌　中納言家家

なくゝとすゝ心の雑子なつかしもや

千五百番歌合　西三位季経

こゝ沛ゆゝ野ゝ雑子の妻を朝ゆゝ雑子

中納言家家

ゆゝ妻ひすゝ雑子の野のきゝ沛ゆゝ

家集春歌中　西行上人

序　思ふとゝつりしてなく雑子

（きゝとゝりのさは発法）

（結句現のうとゝ　万十二　ゆゝ方分　ゆゝ方分　ゆゝ人こゝり）

（雅古紀）

（万十九）

（立日）

（卯イ）

（とイ）

（ちイ）

（ちイ）

（ぞうむる（歌））

（あきゝ）

（を花イ）

（月イ）

（内イ）

（ゆゝ花イ）

（ゆゝ）

（序上）

（思）

（ゆゝ）

（とイ）

（ゆゝ）

（反（抜））

おひかたく芝の若葉行俊くくれ枯野に雑子帰る

家集絵野色に鶏のさそくれ

和泉式部

かりの色と思ふ原に芝の野のあさう雑子うちとくなく

うら人のいとゆかしく雑子のくまもいつる雑子のくまもけさ

永久元年百首雑

神祇伯顕仲

あさましや野やくよりもとしもとし鶏のもの村雨かしま雑子鳴

百首歌

寄念法師

雑子なくこゑもきれぬるすめるすもるとしもあるいはも

鷹狩を百代

左京大夫頼輔

見うしすうもの色山よ立きしやむうもせのひつきるん

家集百代

信中納言長方

百代

雑子なるみうの焼野よ信鶏ちるにかくまそこひ迷ん

百首歌万代

信實朝臣

春日の原陰佛のたとしの山を朝ぬけしらは雑子帰

春歌中万代

建度朝臣

さいさつまゆうくうまきこ吉野の子すこかまとよきこ

庫関歌

前大納言公任

雑子なるとゆきしきるくの山里のうくいう家井也せ

家集春歌雑子を

小舟

我屋とやときの里よ弱とあて朝ふつきを雑子帰ん

家集恋の雑子を

前中納言定房

名ゆかりかんとさきの里よ雑子朝ふつとに雑子帰

百代

雑子なるみうの焼野よ信鶏ちるにかくまそこひ迷ん

信實朝臣

春日の原陰佛のたとしの山を朝ぬけしらは雑子帰

建度朝臣

さいさつまゆうくうまきこ吉野の子すこかまとよきこ

前大納言公任

雑子なるとゆきしきるくの山里のうくいう家井也せ

小舟

我屋とやときの里よ弱とあて朝ふつきを雑子帰ん

前中納言定房

名ゆかりかんとさきの里よ雑子朝ふつとに雑子帰

百代

雑子なるみうの焼野よ信鶏ちるにかくまそこひ迷ん

信實朝臣

春日の原陰佛のたとしの山を朝ぬけしらは雑子帰

建度朝臣

さいさつまゆうくうまきこ吉野の子すこかまとよきこ

前大納言公任

雑子なるとゆきしきるくの山里のうくいう家井也せ

小舟

我屋とやときの里よ弱とあて朝ふつきを雑子帰ん

前中納言定房

名ゆかりかんとさきの里よ雑子朝ふつとに雑子帰

[illegible]

大江匡衡朝臣

[illegible]

寶治二年百首歌奉中納言基家卿

[illegible]

建保三年名所百首　藤三位家卿

[illegible]

家集歌の心を

[illegible]

六帖題新古今

光俊朝臣

[illegible]

○左傳曰元年秋昔賢大夫惠子相與語惠子以無益辯雖反之言

○天智度論云日復沒音默大燒林中有一鵄鳥入水中漬其翅毛未滅大火

宗尊親王

[illegible]

源仲正

家集春雜

[illegible]

○[illegible]

○[illegible]

○鶯子鳥

[illegible]

人丸

[illegible]

高市連黒人

[illegible]

拾集呼子鳥を詠ず

徳倉右大臣

文應元年七社百首

民部卿為家卿

順徳院御製

百首御哥

立春同詠

春下

赤人

家集

朝家

百首歌

布引の滝

法橋

家集

和模

同

顕仲朝臣

同

中務

家集

雅宣朝臣

藤原仲兼朝臣

俊頼朝臣

久安百首

待賢門院安藝

紅葉せんゆふとやあらしたちぬるのみそのの木の呼かな

同

紅葉たる大江家中大進

ふるの山に月はいでぬとなを友ふこえてをとる風

後朱雀院家集

侍人

行きてもらしぬるやまひこをのやまのこえもうつるる

六条院宣旨

家集ちかこと

友もなきをぬれ山よりのものこえのみ呼こえ

播河流水時百首

権中納言時

人新せぬ物なりよりこと

仙人の山より帰る人

同

権僧正永縁

さ来ふくいせの森のうちふこ馬山ひのそこそふへるる

五社百首

身太后宮大夫俊成

思ふ事いせの森のうちふこりあふまもまもなく人のさ

人思ひすの森のうちふこる心の宮もこそよ新人

千五百番歌合

二條院讃岐

なくさをへて井の山のうちふこるむしの紅のたもと

同

呼子鳥

ふるの人をとこのやとこんうちふこ

呼子鳥帰ぬ時ぞいとこ

百首歌

人妻

人妻もなる紅葉よ呼子鳥ふこ

恋人

ワせこをるしもひこ

○仁和寺書目に仏舎利の和と大[illegible]

百首哥　　前中納言家隆

行末きのこやてよ方よ宿らん人ふこゝろ数よ傳ほし

同　　民部卿為家

あつきはきみのゝを心の浮子島まつひとつのをとせをら

建保三年名所百首　　俊成女

名ゆゝおりてのの森のゝふこゝるきゝなの雫の一しを

題しらず　　後人不知

立三　きくかゝるよ松ゝ歌心ゝ人のいとの森よ帰ふこゝる

同イ

立三　みなの月のをりの山ゝふこゝるはあさにの散はきこ

同イ

同　　清原元輔

清の水ゝ流れ絶ぬ山のゝふこゝるいとゝ宿へ

同イ

我せこゝをゝ思ふこゝろの心ゝ中ゝ思ふこゝる

同イ

延喜十三年三月亭子院哥合

○仁和寺書目に仏舎利の和と大[illegible]

あ[illegible]てゝ思ふこゝろ書をゝ[illegible]ふこゝろ[illegible]ふこゝ[illegible]

同イ

家集　　西行上人

詞ゝ書のゝけしの嘆ゝ[illegible]れ[illegible]

稲荷社哥合　　呼子鳥

来ゝのこゝ[illegible]ふこゝ[illegible]

建礼門院右京大夫

○雲雀　　中納言家持

題不知

万三千

雲雀あゝ[illegible]

天平五年正月廿九日詠

万九

う[illegible]

さ四(五)

と(五)

同イ

保安二年七月実卿家百合霞

左大将頭重

雲雀のうつ時ハ雲ハいらの山そこともみえぬ霞さるらく

百首哥

慈鎮和尚

ひとをのうの野澤の胡蝶ハ

春五拾首三の中

権大納言実家

神ふるくあ田のうつ田の夏ハ

九十首哥

後二位家隆

ふる橋あ田の夏のはつ霞ハ

六百番哥合霞

後京極摂政

行心の霞ハ

新勅撰古書下

同

慈鎮和尚

ふるき野人の霞の下ハ

大蔵卿有家

同

伊勢物語ハ

六百

同

寂蓮法師

ふる里ハ

六百三十九

同

か(六百一)

雲ハ入

藤原隆信朝臣

拾集

慈鎮和尚

百首哥

なるゝや野人の霞の

安嘉門院四条

武蔵卿敦有家十首哥

其の野ゝあるゝ時のゝ野ゝ

千五百番哥合　　家隆卿

長秋

義ゝ　　皇太后宮大夫後鳥羽院

同　　後鳥羽院宮内卿

庭のをゝ　　家長朝臣

同　　法橋頭昭

たゝくゝと　　川原

たゝくゝと　　左近中将具氏

建長八年百首哥合

年も移りてゝ　　春望

三百六十首中　　赤三月終

乃ゝ　　さイ　　あ(赤)

百首哥　　寂蓮法師

野ゝ　　春望

元久元年詩哥合　　春

ひゝ　　暮長明

新禄百首哥　　民部卿為家

○苗代

天文二年内裏百番哥　　貫之

あしひきの山さくら見なからそをちかた人も種はまきける

六帖題春の田　衣笠内大臣

新六二
しつかすむいさゝをかはを堰小山田や種まくかとはよそに春かし

御集　花山院御製

苗代の水はけあせとやまさ田のゆくへおもひやるかも

應和三年七月二条摂政家哥合

よみ人しらす

鴈帰てうちつゝ流るゝはるもなほ秋のたのみを春にまくらめ

久安百首　前参議親隆

春川のあさ小田のなはしろにせきとめて[illegible]をやせを種かしつらん

堀河院御時百首哥苗代

俊頼朝臣

秋かりし宿のをしねを思出て春そさくら井に種をまきける

同　隆源法師

池はあれて野澤の水の苗代も田井にそけりこの宿の[illegible]も

同　顕仲朝臣

春あつき山田のをかのなはしろにわかゆきけぬをひきそけん

仁安三年二月西勤寺哥合苗代判者俊成

[illegible]　隆実法師

やせ川をひくの手せきもせきとめてあひ苗代の水をのみなみ

同　よみ人しらす

小もちの作る手まきの池水を我なはしろにせきてそひく

家集　能宣朝臣

青柳のいとうちはへて小田の苗代水も絶しとそ思ふ

屏風に三月田の神まつる所

わか山田の苗しろ水にみなくちをまつくもいのるかな

家集和哥浦にてよみ侍るとて

前大僧正行尊

和哥の浦に種まくきし川そ氣色ありけるあはれなりけり

堀河院御時百首

中納言國信

種おろす苗代小田をせきかくしてそたなかみに種をまく

文治六年五社百首

皇太后宮大夫俊成

しめはふる苗代小田のしめはへて雨の田面もかとそしる

せき入るゝ苗代水のなかれまて雑はむとさりはてぬる

ためにるみちしかはをせきかけてやまかはへさるまふ種の

家集六千首哥中

参議為相

春ふかき小田の澤水せきとめて苗まうつる種かなりけり

文應元年七社百首

民部卿為家

みしめ引そとしるしの苗代にまかせていくかへ小川の水

家集文永元年春哥中

あつまはに若川をせきいれて山田にとひひたくる

中務卿親王家五十首哥合苗代

權僧正公朝

むらきみかまかせのあたりの苗代のみなくちせきたかき種かはらはや

十題百首大嘗祭

寂蓮法師

新田川ほそくまかせて引水もいさゝ

家集百首

源仲正

苗代にまかせて引ほす水ならてせきかゝる井手の小田

題しらず　後人不知

五十四　なりしのこころきよくすみまさるを衣きよりあらはるる心

千五百番歌合　野宮左大臣

前代よりつづけるかずあまたしらるれど

細殿女房　[細殿女房]　[小倉百人一首]

六帖題にすきゆきてやとまりなん前代のこころきよくすみまさるときもなし

百首歌たてまつりし中　七條院摂政

内集女　わすれけり山のふもとをせきつけて前代水よさ深そ

下集　前代入田のよりゆるもあれをのもりのもりしひしる人なし

建保三年百首歌　光明峯寺入道摂政

山田の稲ずきをたのもしさ田のなりしるよせきて

建保三年百首　後二位家隆

早苗とる田子のうら人袖ぬれて前代のよ入にせてし

百首歌前代　同イ

とるつくるなりしかはもあるみをよ白波

山里まきの小田のなりしるけしの水をまをせて

百首歌　源重之

ふきけるかぜもの秋もすくや前代水をまをせ

六帖題新古二　後三位知家

かつなくかぜ出のあるとをもあるなりしるよ

建長三年毎日一首歌中　民部卿為家

玉ぬきのいきけるまはらの山水のなをいそく小田の稲代

同八年毎日一首中　同イ

山ゐの山田のあぜすきひきこしもてあらはれぬ
ちぞいなしこのつゆ　同六年毎月百首中
正和二年毎日一首中　同
前代のこころをもとめてもとめのあぢをいとなみけるぬ
春田新古上
見しきりのあぜのくこひもとめさてなるの雅はたまさ　たへ抜
貞應三年毎一首前代　中
みくもりの春の山田のあぜにいりのこえもちの稲
建長元年十月南殿百首前代　什百兼
なりしの田のあぜよさすがのたちしきをまをゆく
建長七年頭朝卿家続千首寄
信実朝臣

なりしのもめくこひすると山田のひくめのあぜのうれた
○春田
千五百番寄合　参議雅経
里ちかくいく野のすゑをかすみこめるをいとをまの春の田
正治二年百首　源師光
ますらおのくるるをのこのいとなみとて水口まもるいとなを
百首寄　後鳥羽院内裏
春の日の山田のくろをもりかのこのあきをまをそさひしき
○蛙
家集　赤人

公紫神紀也間　日本紀　歌道也
以集巻二若木
四合二年自首
藤原之神代
水田百兼水（兼方）

蝦なくよしのの川の瀧の上のあせみの花そはしにおくなゆめ

蟾蛙　よみかへる　とす

玉川のひかりもよきに蛙鳴このゆふけおもしろやおなじ

吉野川いはつたふ玉ちる瀬のおともかはつの声もこめて行

六百番歌合　蟾蛙　前大納言兼宗

あふよしはいくかさそさもこそいけのかはつの鳴も

同　藤顕

まろこぬ子萬の末葉ひくかりもとくる蝦のなくなり

同　寂蓮法師

庭の面にひとつかへる浮草をかきわけてみきはに蛙鳴也

同　中宮権大夫家房

濁る江のあさくるとむしりて堀江の蛙なきたる也

永久四年百首　蛙　神祇伯顕仲

外にわく年のへにける堀江の水をかきくもりて蛙なくなる

同　仲実朝臣

春ふかき山の井沢のみつのそこにかけをうつして蛙鳴也

同　俊頼朝臣

時しもあれやみ山のもとを胡籙もちのもとの面にまよひて

同　藤原忠房

苔川の浅き瀬にみつくさにまじりて蛙なき

同　源兼昌

いかにせんこの池水のみくさのなかよそにくむ蛙なき

建久元年六月一句百首春歌

前中納言定家

[illegible]

正治二年百首　後二位家隆

川風に井堰のさき柳吹しをれてうつる夏の夕暮　家光朝臣

千五百番歌合

[illegible]

百首三つ帖内裏代　宰相法師

[illegible]

建長八年百首歌合　信實朝臣

小山田のうなくさ苗代乃水のもれてもやさしらん　光俊朝臣

六帖題新古今

[illegible]

[illegible]　信實朝臣

新古今

[illegible]

家集

春ゆくこゝろ[illegible]山の井もあるき清水の[illegible]　源金吾大臣

永仁元年百首　藤原為顕

いらつゝよ帰や帰のうゝ[illegible]

百首寄五首中

[illegible]

家集山家

山家の下枝の花ゝ[illegible]

題しらず　上古唐

[illegible]

[illegible]

ゆきさらぬ時なくなり三輪川の清き流の末をきかばや

同

散花樹よりの思ひきはまりてなく時を

同

石川廣成

家人のよそにきかるる時なくいつの里よりうれへ行

佐一位良教卿

現存古

変ちなくあらしもかの里の時なくこ

平重盛

深水よ時の移いまひとをそくやうつる末の小田

二百五十二首
長歌一首

夫木和哥抄巻第六

春部六

題

董菜 董菜 杜若 歌冬 藤

躑躅 暮春 三月盡

董菜 菜

堀河院御時百首哥 董 从革省仝 或作撞

指大納言公實卿

もゝしきの垣根おもてにうつもれて

同

たゝ春のいとなみ董にかくれて

花中納言定房卿

春の花さかりにあへるつかの董

同

花ぬきに花の数よりあらねとも

同

花攻宮河内

なにしおはゝ畏のつゝみ董

同

仲實卿

堀河院

雲雀あがるこゝろひとつの原にて我ひとり聞くよもぎけるかな　藤原

六百番歌合野遊

正三位季経

野もせにてすみをつむこゝろ人よりはなれぬ家にうらやまれつゝ

家集

後鳥羽院

散木

すみをつむ人の心をたずねてはいかゞ思ふ人もなかまし

千五百番歌合

皇太后宮大夫俊成

松陰にさけるすゝしき花の色にあたるかぜもすゝしかりけり

文治二年撰歌百首

前中納言定家

夏の夜は月の入るまでなりにけりあけぬ山ぢの雲のうへかな

同

六百番歌合

小侍従

その神のかぎりの里を思ひやるこゝろ人ひとりすゝしかりけり

同

正治二年百首

つゝき事もこゝろもとまるくらいのべてや蓮つまは

家集古今蓮

源仲正

すゝを吹くあしのみやこの秋ぞいつすゝしかりけり

陳人不知

すゝ

悔

ふるまつるものゝ数にはすゝしかりけるよつゝとそ

後鳥羽院御百首家歌合蓮

中務

降ぬるすゝしかりけるものゝ数にはすゝしかりけるよつゝとそ

現存

現存ゝ

すゝ吹く岩田のもりのあさぢふの人のつまとも

藤原経平朝臣

文亀元年七社百首

民部卿為家

彩雲のかゝるゆふべの岩田のもりのあさぢふ蓮摘也

千首哥

すまをつむ海人のをぶねのをぶねを神よ
遊覧ものをけこうしてつくすまをさいくよまをのみよいてつて

貞応三年百首董菜

はるやすいてくるの森ものをはるりもり董菜の名をとる

身太后宮大夫俊成

祇園百首董菜

社

ちはやぶるきのもとけをもとめ遊とめ宿も董のこして稀まて

寂蓮法師

百首哥杜間董菜

森

久方のきものくれ森ものをすくもしもへのもつくや神よそむ

西行法師

家集董菜

袖ぬるるあるこのくろまをすもし搗人いこうの目ものるを

久安百首

身太后宮大夫俊成

新続古今

むらさきの根をよりこの野のつゆ董をそそよつもり屋もむ

文治六年百首

同

文暦元年百首

同

いかるがの宮殿のもとにすまをかこもて多のもしまの

同

すまを咲董山野の朝霧よりもはるん搗のこの

同

文暦元年百首

民部卿為家

同

たちくるる遠里山野のつゆ董人ものもこ

同

花の色もさいの屋つゆ董菜のゆりにをもつむ

同

雲ものをたちもの董ものをもる野よまを咲百董つむや

同

遠の春のこのやこのつゆをとれ搗やもしもはるん

建保元年百首

後二位家隆

いかや玉神のりをくすまをれ董むもさいのゆをもれ宮ん

文治六年五社百首　　皇太后宮大夫俊成

むすびおきし野辺の草葉の露のいのちもしばしかりそめ　　藤中納言定家

承久二年内裏百首

すみそめしむかしの墨の色ふかくかはらぬ月の光なりけり

建久元年百首　　同

思ふこと言のかぎりはすまされぬ掛詞のまことばぞ露

文治三年百首　　同

ちぢにそ出る年の暮しを蓮の露葉にたまりつゝ

千首哥　　民部卿家

武蔵野や草の根ばかり分ぬれぬ人をもとめぬ秋の夕暮

西治二年百首　　西三位入道家

むらさきの根ばかりとゝめ武蔵野の草いろ〳〵にあらはれぬ

武蔵国二宮歌合千首家

祝性法師

その色とかの草をもとめすきもせず野に出つゝ草をなる

建久三年百首　　右衛門督

武蔵野や草をとゝめぬ露の色ぬれてもとめぬ人のなさけ

同年十一月當座百首　　同

かるゝ時ちきらぬ人のすゝまれぬ人をもとめぬ秋の夕暮

百首歌奉献　　藤原為相

世を思ふ涙ぬれつゝ草の間に秋をもとめぬ人の一夜

家集　　中納言家持

はなすゝきあやめもしらぬ草の露のつゝみもとめぬ人

題しらず　　柿本人麿

百八 春の野にすみれつみにとこし我そ野をなつかしみ一夜寝にける

長哥　万十七

万十七 さくら花ちりかほとりのまなくしはなく春の野に

菫をつむと白妙の袖折かへし紅の

あかもすそひきをとめらは思ひみたれて

○杜若

堀河院御時百首御哥　杜若

前斎院河内

ちる花をしたひしほとにさける杜若ゝゝあさしてさかぬよもあらん

同　基俊

かり人の衣するてふかきつはたさく時はかりにけるかな

同　太皇太后宮肥後

よろつよにみかたの里のかきつはたさきそふ色そさきまさるらん

同　俊頼朝臣

あらはれておもはぬ沼の杜若人色さかぬ我心かな

同　権中納言師時

むらさきの色にそめてや池水の杜若池のおもかけのさひしかるらん

家集　顕仲朝臣

同 東路のいそのまの沼のかきつはたきてそ袖のつゆもまされる

よそ人しらに

詠草

百七 つねならぬ人くに山のあきつ野の杜若をし夢にみしかも

百七 すみよしのあさゝはをのゝかきつはたきぬにすりつけきむ日しらすも

文治六年五社百首　皇太后宮大夫俊成

むらさきの久さもとつきを清澄をのはいそ浦
こゑきつむあかつの舟とのの杜あの花の久さしてへさて音
ふる池の汀よりつ書かきつけ侍りあり
久安百首　清輔朝臣
ふる屋の池の汀よりてらす波のかきとめまさらぬ
沖集百首　後鳥羽院御製
こやの池のあやめよりよりの杜あの花の人よりもれあつる
文應元年七社百首　民部卿為家
おなじくつきの言い絵のこうかきつけ侍る
絵はくあ志賀のみやこ言れと咲う杜あ
建久元年百首　藤中納言定家
おもさらや下葉よりよりの杜あの花のさらそあさう向響

心家百首水鳥社の　源仲正
なるすむ山下のかきつけもへ文藻の多よ絵
六帖題抄　信實朝臣
わすれぬそこ法色そそ
同　光俊朝臣
おく山のそこもわまのかきつけもて果つる
建長七年頭朝臣家千首
杜若はてや花の色そ
稲荷社奇合百首
あせよけるするの池のうきつ
家集　西行法師

廣澤の河よきけ書かきつけてもいくもしてをうたきあ
現在所に杜あり
いそのうちふる川の八きつ　素の日数つもりそはる
文治二年百首　藤中納言定家
寄鹿山こみやこしけきをなたてよいとゆうかまつふる
百首の杜若　後二位家隆
かきつはたくもりの川をのくしに長まの下はもらしそ
文意元年七社百首　民部卿為家
八橋のもしほれあしのかきつはたこの河ゆくうこ恋ひるる
千首哥
八ちはしきつはきけるもしほの名をこひをうる　藤

後拾遺春上

ちるはなの井もの日ちりまがひ

天暦十一年二月廿六日京極殿家哥合

兼盛

新古今春上

春日野に若菜つむとて雪の

ふりつもれるうへにうゑたる

花

実方朝臣

春ごとに花のさかりはあれど

しかのうらまつ

一条前摂政

山寺に国栖院法住の住実方朝臣馬命婦

と物がたりしてかへりて山の花を屏風に

うへたりけるを

法住

同国栖院法制

みるきりなのひきの花をいとめでて折人侍

建保三年名所百首哥

順徳院御製

ちるもてしたるなるやみるなるを

百首法寺

風雅春二

川の影なれとものこゝろ

同イ

大納言師教

堀川院百首

後拾遺春上

かつらのくるのかはのみなきよりとゝまるはなの

又百首山寺中

同春上

三月のはるのはてにたちかへる

建長八年百首哥合

長盛内大臣

彩雲月散もたるくるつゝ

花山院法制

山集山歌

もろもろの人よみなをやきさけるこゝ

ろ

家集歌合

やきもの色よりもなほ心ぶかきもみぢの花の色

家集又色可黄

散ぬるはきのこの秋花ちりぬるこずゑの霧の消てあらな

家集中

冨士はなほそらにかゝるみちのくはいとその里の心の秋の花

永久元年四月中院入道大臣家歌合 秋

読人不知

まとゐする冨士の色よりいとその里の心ぶかきの花

文治六年五社百首 皇太后宮大夫俊成

心ぶかきのるといふをとゝにやしらぬ雲のゆふの風のすさび

建久元年百首 藤原雅経

歌合 秋

あきのゝ色のあやまちしよりはそめてをとゝしのそらの色

読人不知

きもとき色とこそいふきの心色ふかきまつかりけつ心の花

建暦二年女房

家集中

ゆふ出てうつろふ色をとゝにやしらぬ雲のゆふの風のすさび

寛喜元年女院入内屏風

若川の岩もちしらぬ色ぬめくまき屋ぬめ心の花

中宮春宮中

重之

言もせぬ若かくれなるる心ふかきいとゝ冨士の色の

家集

さもこそとゝもつゝき若よりはいとゝ冨士の色の

和泉式部

長寿

ひきうゑて　ねもすをたけの山　若へのはつ花

ゆふくれの雪

建長八年百首歌合　前大納言頼嗣

我屋とよりうへくらんたけの山の嶺よりうつるはつ花

信実朝臣

同

まこもるる時をとの盛りのそてにさかきの花

村雨

光俊朝臣

同

思ふ事しるこゝろのみちくさにさかきの花

家集中

源仲正

まこもをいかけるものを歌ゆゑ　ふきをつきてのはつく

山路のいとき枝をおりてたすきかけるを

平祐挙

宴の会に八重山吹をたてまつれる　九重(指)

大臣家五十賀屏風よ

元輔

ちくのよ咲ねたりを我屋とのかきねきのさかきの花

屏風よ屋り水のつよ山吹水ゆ

恵慈法師

水ゆるる所川の山さきをそいとふ

小舟

同

なんかるのきゝ池水のふかさけて金の色

山寺家集に七の寺合の比

とゝ題を侍りて初かの初ひとゝ
らひけるとゝろ
葉歌合
徳金大臣
ゆく宿の八重の山吹散ぬとも神の
河邊歌合
同
山吹の花の雪ゝ神ぬきて玉川の里
百首哥
前中納言定家
ゆくとゝ山吹ゝ
寛喜女御入内御屏風川邊歌合
西園寺入道前太政大臣
感興
さゝ川乃水ゆるゝ
山吹の花さく宿の山吹
同
後二位家隆

歌合乃花さくちゝ
同
西三位知家卿
あるゝくゝきの山吹
野宮左大臣
山吹の花乃ゝ
光豊院入道二品親王家五十首
西園寺入道太政大臣
ちゝ乃ゝ山吹乃せゝ
常盤井入道太政大臣
同
ゆくとゝ
家集
後二位家隆

立つ[illegible]の神やたちなれきのうつ[illegible]山ぶきの

山吹家七朝臣家集云貞應二年三月八幡[illegible]

時奉宮仕のかぢ結つとめ侍し次の日家隆卿より

[illegible]つかはしける

[illegible]

家長朝臣

いとあさからぬうらをうらめしあまをとも[illegible]そうつ[illegible]の山ぶきの[illegible]

[illegible]元年[illegible]月十日南殿百首山吹

為實朝臣

[illegible]の色のうつろひぬ[illegible]ぶきの

貞應二年百首[illegible]

民部卿為家

[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]

[illegible]二年百首家歌

同

[illegible]

[illegible]

文應元年七社百首

雲義

[illegible]の[illegible]

[illegible]

日吉

[illegible]の[illegible]

同

[illegible]

作者

[illegible]

家集歌

[illegible]

[illegible]

弘長元年百首

後九条内大臣

[illegible]

[illegible]

家集

[illegible]

六帖
春ふかみさしひちて神なひの川へまさけろ山吹の花

同　前大納言為氏

山吹はいまを盛と咲まさりあさの井手の里のさとよ

続拾遺集　後鳥羽院御製

山吹の花のさかりをさして小垣根や井手のさとふりなん

六帖　題しらす　読人不知

あなたふらしかも逝しや山しろの井手の山吹人まこやきさ

百八　新古今下
蛙鳴神なひの川にかけみえていまやさくらん山吹の花

厚見王

五十七
鶯のきなく山ふきうたかたも君か手ふれすは花ちらめやも

内裏百首　里款冬　従二位行家卿

うくひすなきなく山吹さかりなるたまをとむる井手の里人

款冬　正三位知家卿

祝
晩郷子の長の代やまとし神の時ふきさき此山吹

弘長元年五百首　衣笠内大臣

旅
ゆくこつはけふそわかるゝきしろの里の山吹の花

千首寄　民部卿為家卿

神なひのきしの山ふき散ぬらしいはこえるならの川波

なきとめ木末の梅ちりはてゝうくひすきなく井手の山かき

文永二年毎日一首中

さけもこそまたをきゝ山吹の枝よりうつる春の夜の霧

同八年毎日一首中

山ふきの花のまつきの春の露ぬれてさむさもいとはさりけれ

同年毎日一首中

いそのかみ　ふるのなかみち　ふりにしを　こころのにはの　はなにとはばや

心階入道左大臣家百首　同

さかれぬる　心のこずえ　ゆきのうちに　ひとすぢ　ゆかぬ　はるのあとかな

家集　寄花語　寄

新拾遺

あかなくに　ちるをうらめし　ゆきのうち　ゆかぬ　はるのあとかな

左大将俊通

七百首　三月　寄水

いくとせの　はるのなごりの　ゆきのうち　ゆかぬ　はるのあとかな

権正僧正頼基

家集

ちりすぎて　いくかのこれる　はなのうち　ゆかぬ　はるのあとかな

同

建長八年百首　三月合

参議大納言伊平

約束の　ちぎりといふも　うらめしや　ゆかぬ　はるのあとかな

同

鷹司院帥　卿

ちりもとの　ゆきのうちに　ゆかぬ　はるのあとかな

判者　知家

六人めぐりきの　ちりぬるかぜの　ゆきのうち　ゆかぬ　はるのあとかな

歌人　ちりぬるかぜの　ゆきのうち　ゆかぬ　はるのあとかな

歌人　ちりぬるかぜの　ゆきのうち　ゆかぬ　はるのあとかな

歌人　ちりぬるかぜの　ゆきのうち　ゆかぬ　はるのあとかな

仲實朝臣

播磨守時百首

ちりぬるかぜの　ゆきのうち　ゆかぬ　はるのあとかな

後嵯峨朝

同

ちりぬるかぜの　ゆきのうち　ゆかぬ　はるのあとかな

歌人　ちりぬるかぜの　ゆきのうち　ゆかぬ　はるのあとかな

家集

藤原重定

玉井北河よりさけるを吹と人るべくよろつ事式

里歌

光信朝臣

里の名を書てきさけを歌の内ゆとの春を吹

○藤花

延喜御時内裏御屏風

貫之

春毎にうゑおくかひはあるいきそめしかはやまの

藤の花

延喜八年大将家歌屏風

為

なをはなをいとはなをけつて位の河きのみなとよさけの

春

延喜七年ちうそうそまちりけつ内裏屏風

歌

今きそよのこをあきこの春波はいきのみなとの波り

延喜十三年三月亭子院寄合

兼覧王

風はけもおもはゆるかな位の河きこの春波いきやそ

天徳三年内裏寄合

兼盛

日をしく春ちうもりの位の河春波ちりしそ

弘長三年仮名

民部為家

位のはのきこの春そ春はかなる

同

前大納言為氏

春

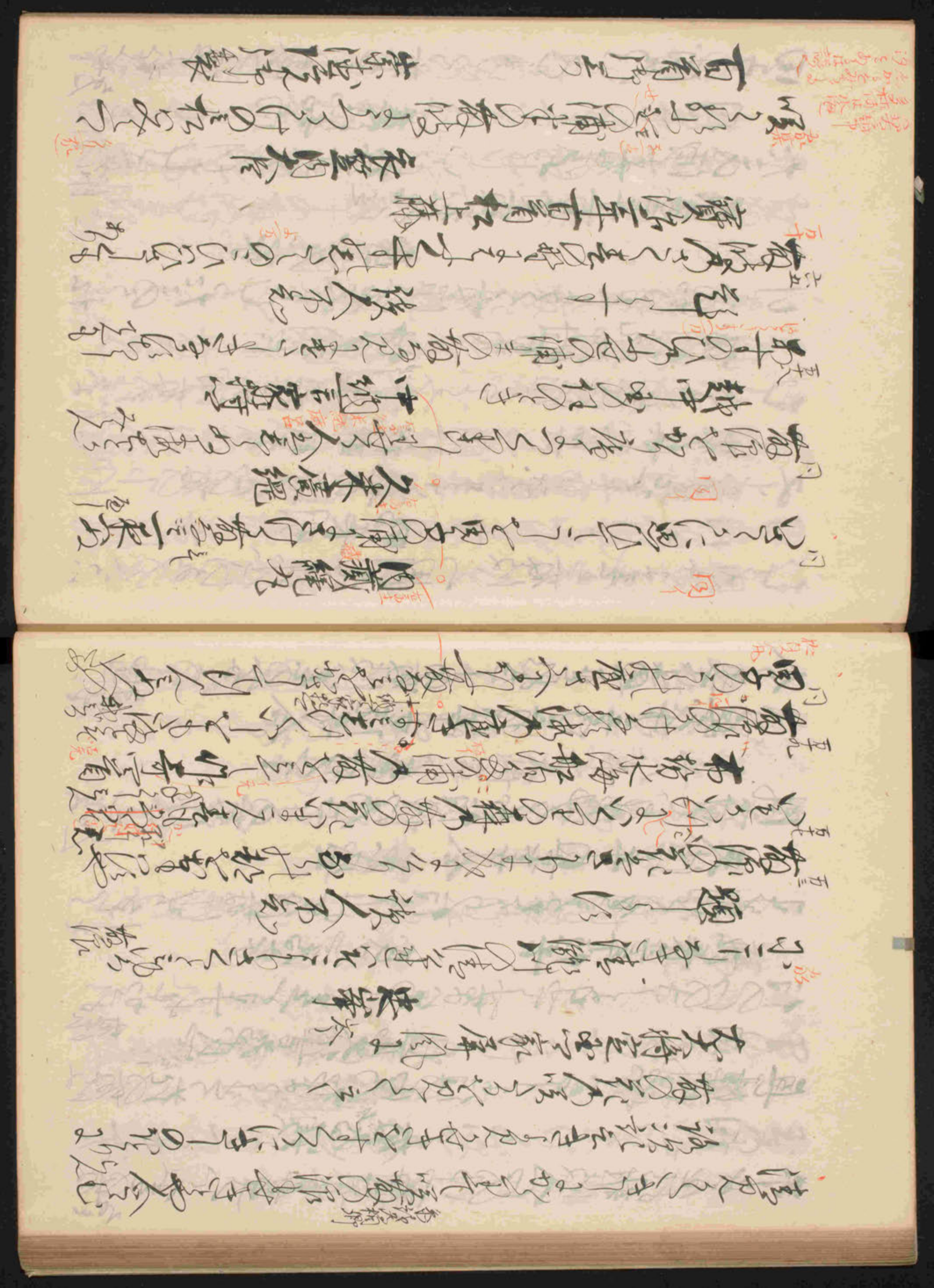
長津内侍とい年の位の河春ちうもの花の春波

同

春為頼

春毎にうゑおくかひはあるいきそめしかはやまの

春



田子の浦うちいでてみれば白たへの富士の高嶺に雪は降つつ　山部赤人

同

たこの浦より春景をのぞむ　藤原為家

貞応二年百首歌奉れる時

春の来ぬ山の松木まつのかぜ　藤原為家

春風の色みてそしるたこの浦　仲実朝臣

堀川院御時百首

もゝさきのさき咲ちるとみるまでに　たこの浦春花　祝部成茂

家集

現ヲ六現ヲ

みしら山雪をそたきつるさゝなみの　春の下風　鴨長明

同

もゝさきは春ぞ咲らん　同月そ弥代のみつの浦

同

もゝさきの花そゝらん春の風　海道洲

寶治二年百首松上春　信実朝臣

下枝のもゝ咲ぬれは浦松の　春風ぞ吹　浦島春花　平忠盛朝臣

春風ぞ吹ともみてそ春の松の　白の浜なれて春花を　藤宣朝臣

白の浜なれて春花を　藤宣朝臣

白の浜なれてもゝさきの春はむ　さらぬ

うらのあまのすむ松いろ　春の海をこゆる春

山ちかくすむ春の海をこゆる春

よかさねられる内侍のつぼねさしつれひもち春花

をものうらにしるして侍るをとて

家集障子絵のよ侍のきとめりて歌をかく

いくたびか清てかくらんあるかぎりの侍のきに歌

題しらす　　参議雅親

うらぶれこうかミかしつる歌の花神なつかしかるらむ

家集春三の中　　惠慶法師

ちるはなりとやなの色をあすまてとこの侍のもとに

右大将家障子の絵のかきに書る歌

ひくあるはけさとなきに歌侍にうるさいをあるはけり

春部　　重之

後九條内大臣

あまの人をかなしてをる歌のうけ侍にまきものに

的をうけ侍りとよ大井川を作て松に歌のうるはし

立ぬりみてを流る大井川色の松よかゝる歌侍

法眼金大臣

清蔵法師合　　西行上人

歌侍をみもすそ川のまきをいとをけよ松のうえ

家集　　鴨長明

三月ちるすゝ川の春の松しよ春の人歌のうるはし

百首歌　　正三位知家

とりあつめあはれの川の歌侍のうちまきせよ

貞応三年百首故郷歌

民部卿為家郷

春之人々おほの里のさかえをいのりけて
　　嵯峨春夜　　春秋為樹
くれぬこの春の日数は咲そめてさらに夜よりうる梅
　　石下寺中　　同イ
枝ひろげ河の松よりさく梅　　為家
同
霞ゆ春の海まつ梅
　　小野社百首歌合
みやこ出て春川の入梅の花　　後鳥羽院御製
故郷梅を
みやこの春ゆくさのうる松
　　菩提院法歌
文治六年女御入内御屏風　　人家庭藤咲
三條入道右大臣
寛喜元年女御入内御屏風　　荒中納言定家
天仁元年大嘗会　　梅屋四方御所
大嘗会主基方御屏風　　荒中納言定房
後鳥羽院御時　　松上雪　　同イ

家集のうちを撰ばるとて　　信基法師

[illegible]　　信西永縁

[illegible]　　信西永縁

[illegible]　　後頼朝臣

同

[illegible]　　[illegible]

晩見花といふ題を　同イ

[illegible]　　[illegible]

家集花　　法仲正

花原のうつまをもとめさしのまきそめきうつまつころ　ジイ

花　　源九海

[illegible]

題しらず　　菅原大政大臣

[illegible]　　野宮大臣

千五百番歌合

[illegible]

百首歌

[illegible]　　後二位家隆

藤花を　　後恵法師

[illegible]　　上西門院兵衛

松に[illegible]

文永二年七月御時百首　　浦藤

新撰万葉集

思ふ人わすれやすらん逢ふ事のあるよ春咲くうめの花

後法成院摂政

家集春花の盛りなる松のもとにて

春深みかすみたちこめ松のうへにうぐひすなきて見るめ遠しと

春の花

天永元年閏三月家集合春花

法有仲

波こえぬ人もとまらぬ春の松枝をたくかぶる春の花

大宮大納言

百首歌

春深みこずえをもとめてみゆるかな春の花

右近中将仁衡

長治二年百首

春の陰入道二品親王

ちるのこすまつの春の花こそさきもしもとひあらん

新撰朗詠百首

安嘉門院四条

下もみぢ散りはてぬれば春の花さく色のみ残る松

十二首和歌 清輔朝臣

拾遺抄 定意

春の花すでにさかりの春の日の残りて色をそふる

寶治二年百首和歌

後久条内大臣

雪のこる春咲くうめ山ふかみ春の風にほふらん

建長八年百首和合

大進中将経家

をとつ年松の春さくはつ花の中に

同

前大納言仲平卿

ちるさくらのこの世の春の花色のあるやなきらん

同

ゆるぎなくさかえの御代のためしにもいまさらに
見るすがたかな　　人丸

かとの殿の歌よみ侍りける
建保四年百首　　前中納言定家

色まさる御代の歌所神代にもかくやとみちの人のこころ
養和元年百首　　藤原俊成

春日山岩の根しめる
南海漁父百首　　藤原行家

見るからにさのをはけしきさかりかな
伺集歌記　　鷹司殿

後嵯峨院御

春日山さらぬ春よりいとゝ雪のあけぬる
家集　　後鳥羽院

心さしを松の根のゝ清水にきこえよさしそそぐ
女院御歌　　藤原信実朝臣

春のきてよくゝ雪のまつ
伺集　　後嵯峨院

春の花むすぶ清水のゆく末
後嵯峨院

春の来ぬるかとゝ花のうつろふ
古伺歌集　　民部卿為家

ゆくとくとゝまきあるものの春の花

沖集三首はこの山家の歌

後鳥羽院御製

雲のうへ花の咲きちりかすみもて世の春をすぐしやはらぬ

山家藤　　従二位家隆

ちりはてぬよはひをさけの春のうつるこゝろの花のうへかな

家集春哥中　　同

さきそめしいとゝ移ろ家の春の大川のへよさけの藤波

移ろはぬ色をしたれば春の花咲くはそやまをとをしら

この里のさきの森の春の花の色

百首哥歌

咲かぬ春ゝもちさきの春波をたゝりまつの風

六帖歌　　長生門大臣

さびの形ぶりくるやもしひんみのさの森の春の雪

正和三年毎月一首哥　　民部卿為家

とゝ山松の春のこゝろよかまとゝ引てたゝる時雨

百首哥　　八條院高倉

山ぶきのはなの春波ちりてやこゝ形んもしさの

家集中　　前中納言定家

たのしられさけの春波雪をへゝ雪岸は日影てゝ

百首哥歌

九重の九ゝきの春の花さゝ雲井は雲のさゝなみ

治承二年大臣家百首　　後京極摂政

ふるさとあきの文人ありよせ雲井の庭よ春のさりと
寶治二年百首松春
光俊朝臣
むらさきの雲ととられた春の花咲まれる松の梢
同
將門伝
九重の池の春波うけてこそ汀の松も色まさりけれ
顕季卿八条家春花尺てまりてよめる
俊頼朝臣
波風よ春江のきしを見渡せば波せは浦を木末入れまき
建暦百首三の春
藤原大臣宮大夫俊成
もろ海ふるもろもろの浦よりてかすみもたつを
文治六年五社百首
同

春の花雲ゆまろひく数ちりまを波ゆ雲見
同
雲の山松ふるれる春の花浦のさ波ふるそ見る
文永元年七社百首
民部卿為家
世ふけて春しさるよりこ山やまさせる雲の春波
同
このしるこ春の春ひろ海をとのちひをけて春
千首和
同
いとゆるさぬ雲井の春の春のもとりはせけて神やまらん
家集松春
拾遺巻二朝
さけ春の松の末まよまとと春と山ふ季をけて春
同
雲の上人をゆ春の合判して
しけ時
前中納言定家
神路山ちつの末まよまとと春花さをもひと

同

弾誘山ちかきもみぢの色をうつす水の面にひかりけり

前内上人

鄰躑

題しらず

詠人不知

百三 かきくもりあめ降りぬべし久かたの月の出でぬ夜の浦の面

百四 久かたの月の出でぬ夜の浦の面のいとどくもりぬべしかな

百五 ひさかたの月の出でぬ夜の浦の面のいとどくもりぬべしかな

百六 玉藻刈る海人の袖の浦の面の波の白玉ぬれぬべしかな

寶治元年五十首

雪傷江朔

後嵯峨院

家集

初恋

百七 ながめつる月の出でぬ夜の浦の面の波の白玉ぬれぬべしかな

六帖題

光俊朝臣

百八 沖つ波みなの浦風吹くなれば白玉ぬれぬべしかな

長月

百十二 ながめつる月の出でぬ夜の浦の面の波の白玉ぬれぬべしかな

人丸

百九 白妙の袖の浦風吹くなれば白玉ぬれぬべしかな

百十 白妙の袖の浦風吹くなれば白玉ぬれぬべしかな

百十一 白妙の袖の浦風吹くなれば白玉ぬれぬべしかな

百十二 白妙の袖の浦風吹くなれば白玉ぬれぬべしかな

新古春

百十三 くもりなき春の月の出でぬ夜の浦の面の波の白玉ぬれぬべしかな

同

百十四 あまのすむ山の出でぬ夜の浦の面の波の白玉ぬれぬべしかな

常陸院殿

順徳院御製

三百首はこの

あすの川はまの人やうさはらん　中務宮家集

題不知　後撰人しらず

ふるさとをとつのさとの見つゝ我くるまそらかとみまそ

正治二年百首　武士内親王

ものおもふとつのさとの見つゝしいとゝやとる人の命

家集寛元四年ヨリ　後二位家隆

あるるよりとつの浦人見つゝしゆとゝ海

建保三年名所百首　前中納定家

見わたしていとやとるもしら波の色とてさ

同　後二位兼家

春ふかきものの山見わたしいとゝ庵ひとる

家集

みちのくにのうちの浦はてまういはるゝしのとゝ

はこの武人のくにのうちのとゝ

書てとりてとゝ侍るまいよりとゝ

みちよ侍るゝ経信卿

梅後撰朝臣

梅さくゝ春とゝわまこ我屋とゝ侍しの花さとり

せし　大納言経信卿

花の春なくさめよせんすの家やの里の見つゝ

題不知　観音院

をを

いるらたいひはとれてもつてしやとけうらひ

堀の院御所所石寺会

[illegible]　指中納言後忠

家集所[illegible]　出寺

[illegible]　家集三首之中　好忠

[illegible]

[illegible]　後拾遺所載

[illegible]

百首御寺

[illegible]

家集寺歌題之

[illegible]　法仲正

[illegible]

永保三年准后倫子家後百和歌会寺　実氏

[illegible]　良暹法師

[illegible]

[illegible]　相模

[illegible]

永久三年百首歌題

[illegible]　神祇伯顕仲

[illegible]

[illegible]　仲實朝臣

[illegible]

[illegible]　後拾遺朝臣

[illegible]

同

なにはやはたらしの里をまてみまいあるものすそをなれかはらつる

二條大納言大宮殿

はたらしを杉除意

杉園法師

何のかをもの人里の見はたらしをなをなれ

夜集

山ちのいとの里の見つてしいまくりき新の新

前中納言匡房

金葉春三の

おの月のの里の見つてしをもはるれ

同

金葉の月のの逃の見つてしを春をはるれ

指中納言長方

家集春三の

おの月のの里の見つてしをもはるれ

文永七年毎日一首中

民部卿為家

なれ年のきの里の見つてしの月新てをなれ

同年毎日一首中

夕月新をくれ山ちいとつてしをあを春を速

躑躅為山光

同

ちしの里の見つてしをあを春を速

西行上人

山ちのつし

きつてをひをそつてしをとををを

滝たちのとゝの山のこゝしくもそをけてやうつ
家集　　前内大臣
神代山ゝ桜のつゝしはよりこゝうま神の色よりつ
建久元年百首　　藤中納言定家卿
ちらしの神もそゝもあれんこゝろきゝ心もつゝし峰の雪はよ
古帖題　　民部卿為家卿
ゝ月さしはゝ雲のれのつゝしのきいかきそよ花さゝ
春歌為相卿
ゝ雲百首
ゝ雲ゝ峰のれのけよ春ゝ月の多そ
名所百首　　同
ゝのゝ陰ゝてのきしはゝ雲ゝ
同　　為実卿

たゝ山ゝのはゝての花つゝしゝ月ゝ雲ゝ百ゝ
海道百首　　為氏
ゝ月ゝ花ゝ花ゝ
弘安元年百首春歌　　為世卿
ゝ花ゝ花ゝ
春歌為相卿
ゝ花ゝ花ゝ
後九条内大臣
ゝ花ゝ花ゝ
ゝ花ゝ花ゝ
ゝ花ゝ花ゝ

つきもれぬき哭きの峯よりしぐるる雲

千五百番三の合　左　信実朝臣

俤人の住いきけとは見ぬ山のひまゆ哭つる

六帖題　信実朝臣

鶯よりくる山ぶきの花ゆゑ哭ぬ

同　長実内大臣

きつてのいとはつ哭つ一時哭ものいとり大うとい

建長八年百首千合　同

石ゐき哭ぬ哭ぬ陰のひめつ一人もすきめ哭ぬ

同　信実朝臣

山陰よりいとりの哭の哭ぬ哭ぬ哭つ一ぬけ哭こそ見ぬ哭

判者　知家卿

仏きあり書よはつ一ぬ哭ぬ哭ぬ哭ぬ哭ぬ

とりせり哭ぬ哭ぬ哭ぬ哭ぬ哭ぬ

何ても風流あり哭ぬ哭ぬ哭ぬ哭ぬ哭ぬ

みけ哭こそ哭ぬ哭ぬ哭ぬ哭ぬ哭ぬ

仏哭ぬ僻事哭ぬ哭ぬ哭ぬ哭ぬ

暮春

文永八年毎日一首中　民部卿為家

とそ撫哭ぬ哭ぬ哭ぬ哭ぬ哭ぬ哭ぬ哭ぬ哭ぬ

正嘉三年三月一日言の葉を

かそ哭ぬ哭ぬ哭ぬ哭ぬ哭ぬ言の花哭ぬ

法名院入道法教家五十首

後二位家隆卿

言葉にはたらひの花をなをしまぬ春の月

野宮左大臣

同

東海道の名所を行かとしのぶの草のいつくへ

後嵯峨院御

山里の人もこすゑの春の色にあくるまつ

後鳥羽院御製

百首歌

春の来ぬ山のはの松のあけぬるに

同

あすの風花のかをる人さそふ

後九条内大臣

百首歌の内春

文治の撰寺御

同

ゆく水の山きの陰の人ゆゑ

同

貞応百首歌

うくひすの山ぶきの陰の岩の根

春御歌

太政門院御製

夕附日さすこのもとの春の雨

文集百首歌

春日少

藤中納言定家卿

ゆくすゑのさかりをかけてかすみの

光明峯寺入道摂政家百首歌

春

後二位家隆卿

あつさちる花の色にはあらねとも

題しらす

清水寺開基

[illegible]

春浮寺中八人家　後九條内大臣

[illegible]の山[illegible]人のこゝろ[illegible]

南海漁父百番三人合　慈鎮和尚

[illegible]

[illegible]

浮世春雪浮寺　後京極殿

[illegible]

六百番三人合　藤春

[illegible]

家集春六中

[illegible]

[illegible]

[illegible]

○三月晝

五十首作者

いかなる千年をかへたるの第七の社神まつりの事

千五百番歌合　寄釜法師

ありまやま　ゆきの中より　出るとて　ゆきのもとに　ゆきをまつ

百首歌　三月晝

慈鎮和尚

くれ竹の　ふしの間をしの　ぶるかな　ゆきの別の　ゆくへ

文治六年五社百首　住吉社

かつらぎ　ゆきの中より　出るとて　ゆきのもとに　ゆきをまつ

千五百番歌合　法橋頼政

ゆきの中に　ゆくへ　ゆきの中に　ゆくへ

建長八年百首歌合　信實朝臣

ゆきの中に　ゆくへ　ゆきの中に　ゆくへ

春光品是有明朝　千里

ゆきの中に　ゆくへ　ゆきの中に　ゆくへ

唯殘半日春

一年よりこのかた　ゆきの中に　ゆくへ

兩度春光同日晝

ゆきの中に　ゆくへ　ゆきの中に　ゆくへ

天慶二年宰相中將家屏風三月晦日

ゆきの中に　ゆくへ　ゆきの中に　ゆくへ

三月晝　大僧正行尊

ゆきの中に　ゆくへ　ゆきの中に　ゆくへ

正治二年百首

春ゆかぬ人のこころの花の色の袖にとまれとまきこけてなり

同

春の月ゆかぬ人のこころにはいかにかすみの色をかくらん

千五百番歌合　従二位保季卿

ちるくもはいつくへ春の月ゆかぬ人をのこすらん

天徳四年三月晦日内裏歌合　博古卿

行春のとまりもしらぬ雲の色にかすみのこしてとはるらん

文集百首　春歌　春夜人宴　資忠

春の夜の月にあはぬ人のこころにはいつくの春をとはるらん

前中納言定家卿

宜秋門院丹後

春ゆかぬ人のこころの花の色の袖にとまれとまきこけてなり

同

春の月ゆかぬ人のこころにはいかにかすみの色をかくらん

千五百番歌合　従二位保季卿

ちるくもはいつくへ春の月ゆかぬ人をのこすらん

天徳四年三月晦日内裏歌合　博古卿

行春のとまりもしらぬ雲の色にかすみのこしてとはるらん

文集百首　春歌　春夜人宴　資忠

春の夜の月にあはぬ人のこころにはいつくの春をとはるらん

前中納言定家卿

六十五題歌　九条将軍家月詣歌合

簪用鈴

こころにもあらぬ春の夢のまくらにはいつくの春をとはるらん

洞院摂政家百首　嘉春

家長朝臣

行先をもとしらぬ春の夢のまくらにはいつくの春をとはるらん

三百五十八首　長歌四首

110X
495
21